

幼児前期の保育活動(一)



金 岡 本 明
井 淑 子

はじめに

子どもは、毎日さまざまな活動をし、いろいろに発達していくきます。その有りさまを、私たちは、学校や幼稚園、保育園などで観察することができます。しかし、入園前の子どもたちは、一体どんな活動をし、どのように発達しているのでしょうか。そこで、2才児の子どもたちについて、見てみることにしました。

目的

2才児を同年齢集団の中で、幼児のさまざまな活動の一部である「粘土活動」「音楽活動」を課題として与え、実験群は3ヶ月間保育します。一方、3ヶ月後に、家庭で特別な課題を与えられず普通に生活してきた、2才児の統制群と、「粘土」「音楽」「社会性」の3つの観点について比較し、発達及び、その保育効果をみて、2才児の発達や活動の芽生えをみます。

方法

保育期間は、実験群は、昭和40年6月から9月まで3ヶ月間、毎週一回、約一時間半のうち、前半は「粘土」後半は「音楽」の課題で合計15回行ないました。また、統制群は、9月から同様に、3回保育を行ないました。両群共に、保育開始前と、終了後と2回家庭訪問し、母親にインタビュード、子どもに乳幼児精神発達診断を行ないました。保育者は2名で、保育者の態度としては、特に、子どもからの要求に対しても、できるだけ受け入れるようにし、課題へのきそいかけは、強いきそいかけはしないようにしました。また、子どもたちが、自然に伸び伸びと、活動できるような雰囲気をつくるように心がけました。

1、実験材料

ドーフ粘土(毎回2kgの小麦粉を食紅などで着色したもの)

紙類：折り紙、包装紙、ラシャ紙、画用紙

牛乳びんのふたとビニール

箱、綿、ひも、割りばし

クレヨン、のり、セロテープ、はさみ

実験群			
氏名	CA	DA	DQ
A夫	2:9	3:1	112
B夫	2:8	3:0.5	114
C夫	2:7	3:0.5	118
D子	2:7	3:2	128
E子	2:7	3:3.5	127

統制群			
氏名	CA	DA	DQ
F夫	2:8	3:3.5	123
G夫	2:8	3:1	116
H子	2:10	3:2.5	113
I子	2:9	3:3	118

被験児は、実験群が、男子3名、女子2名、統制群が男子2名、女子2名で、年齢では、最年長と最年少の者の差は2ヶ月で、

発達指数は、6月現在では、112から127の間で、全員標準以上でありました。

なお、本実験の「粘土活動」は金井、「音楽活動」は岡本、「社会性」は二人が担当と、まとめとを行ないました。

一、粘土活動

2才児がある期間継続して、粘土活動を行なっていくと、どのように、その粘土活動がなされていくか、また、実験群(13回～15回)と、統制群(1回～3回)に3回ずつ紙細工活動も行ない、どのようになされるか、次の点についてみます。

①粘土操作について

本実験で見られました粘土操作は、観察記録と、写真を基にして、操作が主にどの部分が中心になつてなされているかという観点から、操作の類型を分類し、分析基準を作成しました。表1の通りです。

先ず、全体の操作をみますと、表2の通りです。

両群1回～3回までは、平均11～12の操作を行なっていましたが、実験群の15回まででは、平均22～23と約2倍に操作数の増加がみられました。即ち、実験群では、回を重ねるにつれて、多種多様な扱い方をするようになったといえます。

次に、項目別に見ますと、表3の通りです。

- ②粘土活動の段階分けについて
- ③紙細工活動について

実験群の1～3回までは、基本的な操作と考えられます。手による操作、指先による操作、構成の3項目の操作は、統制群と比

表1 粘土操作一覧表

項目	実験群						統制群				総計	
	A夫	B夫	C夫	E子	O計	◎計	○○計	F夫	G夫	H子	I子	
手による操作												
たたく	○	○	○	○	3	1	4	○	○	○	○	4
こねる	○	○	○	○	3	1	4	○	○	○	○	8
押す	○	○	○	○	2	1	3					1
まるめる	○	○	○	○	2	1	3	○	○	○	○	3
こすり合せる	○	○	○	○	1	2	3	○	○	○	○	4
折る	○					1						1
手のひらでころがす					○	1	1					2
												1
指先による操作												
くつづける	○	○	○	○	2	2	4	○	○	○	○	2
こねる	○	○	○	○	3	1	4	○	○	○	○	8
ちぎる	○	○	○	○	4		4	○	○	○	○	8
つづく	○					1						1
ペタペタさせる	○						1					1
ひっぱる	○	○	○	○	2	1	3	○	○	○	○	4
瓜でひっかく	○	○				2	2					3
ひねる	○	○	○	○		3	3					3
指で穴をあける	○				○	2						3
押す	○	○	○	○	2	1	3	○				4
折る	○					1	1					2
ふる				○		1	1					
つっこむ								○	○			2
身体接触												
足で踏む	○			○	2		2					2
乗る	○					1	1					1
足でける		○			1		1					1
指につける	○					1	1					1
ほうにつける				○		1	1					1
食べる真似				○		1	1					1
腕・肘をつく	○					1	1	○				2
抱える	○			○	1	1	2	○				3
投げる												
投げる	○	○	○	○	3	1	4					4
ころがす	○	○			2		2					2
持ち歩く												
持ち歩く	○	○	○	○	1	2	3					3
動かす	○	○	○	○	1	2	3					3
道具使用												
はきみできる	○		○			2	2					2
スプレーできる								○				1
のりをつける				○		1	1					1
水をかける	○					1	1					1
水で洗う	○		○			2	2					2
タオルでふく	○	○				2	2					2
汽車にのせる	○				1		1					1
牛乳びんのふたをつける	○	○	○		3	3						3
ビニールで包む				○		1	1					1
ブロックにつめる	○					1	1					1
構成												
並べる	○	○			2		2			○	1	3
重ねる	○	○	○	○	2	2	4	○	○	○		7
たたせる	○		○		2	2						1
○ 計	13	13	4	15				8	18	11	8	
○○ 計	16	10	10	11								
○○○ 計	29	23	14	26								

○は1回目よりみられた扱い方

◎は4回目以後に見られた扱い方

表4 一人にだけ見られる操作

項目	操作	実験群			統制群				
		A 夫	B 夫	C 夫	E 子	F 夫	G 夫	H 子	I 子
手による操作	手のひらでころがす				○				
指先による操作	つっつく	○							
身体接触	ベタベタさせる	○	○	○	○				
	ふるふる	○	○	○	○				
	足でける	○	○	○	○				
	指につける	○	○	○	○				
	ほほに付ける	○	○	○	○				
道具使用	食べる真似	○	○	○	○	○			
	スプーンで切る	○	○	○	○	○			
	のりをつける	○	○	○	○	○			
	水をかける	○	○	○	○	○			
	汽車にのせる	○	○	○	○	○			
	ビニールで包む	○	○	○	○	○			
	ブロックへつめる	○	○	○	○	○			
	○の数	1 5	0 1	1 0	1 5	1 1	0 0	0 0	0 0
	◎の数	5 1	1 0	0 5	1 1	1 1	0 0	0 0	0 0

○印は1回目より見られた扱い方

◎印は4回目以後に見られた扱い方

表2 操作の総数と平均

	実験群		統制群	
	総数	平均	総数	平均
1~3回	45	11.3	45	11.3
1~15回	91	22.8		

表3 項目別にみた操作数の平均

項目	項目数	回	実験群		全体平均
			操作数平均	操作数平均	
手による操作	7	1~3 1~15	3.3 4.8	4.3	3.8
指先による操作	13	1~3 1~15	4 7.3	5	4.5
身体接触	8	1~3 1~15	1 2.5	0.5	0.8
投げる	2	1~3 1~15	1.3 1.5	0	0.5
持ち歩く	2	1~3 1~15	0.5 1.3	0	0.3
道具使用	10	1~3 1~15	0.3 3.5	0.3	0.3
構成	3	1~3 1~15	1 2	1.3	1.1

べ、少なくなかつたのですが、15回までは、全ての項目に関して、統制群より多くなされるようになりました。また、実験群の3回以後に、新しくなされた操作の増加の多かった項目は、道具使用の項目でありました。例えば、粘土をはさみで切ったり、水をかけたり、おもちゃの汽車に「ハンドル」とか「ライト」とか「ナンバー」などといったくつつけたり、牛乳びんのふたなどもつけるなど、見られました。それと共に、手による操作、指先による操作などにつきましては、新しい操作の増加は少ないですが、1~3回までに見られた操作が回が進むにつれ、より高度化されました。例えば、手による操作項目の「たたく」でも、より力をこめて強くたたく、といったようになつてきました。また、扱う粘土の量も増加していきました。

次に、一人だけに見られた操作については、表4の通りです。

1~3回までは、両群ともに、ほとんどなく、このことは、反対に皆が同じような操作をしていることだと考えられます。実験群の4~15では、特に、身体接触の項目に多くみられるようになりました。これらの操作を行なった、A夫、E子の二人は、実験群の中において、いろいろな面に活動をしていましたが、みられました。

次に、両群合わせて、7人以上の被験児が行なっている操作は、手による操作項目の、たたく、こねる、手をこすり合わせる、指

先による操作の、こねる、ちぎる、ひっぱる、構成の、重ねる以上7操作ありました。これらを粘土の観点から見てみますと、

・形を変える働き……たたく、こねる、手をこすり合わせる、ひ

っぱる

・分離する働き……ちぎる

・結合する働き……重ねる

と、以上3点に分けることができます。

一方、手による触運動活動としては、

・手の上下運動……たたく

・手を開いたり閉じたりする……こねる

・手のある方向へ動かす……ちぎる、ひっぱる

・両手を交互に動かす……こすり合わせる

・指先を使い力をこめる……重ねる

などに、分けることができます。これらは、2才児にみられる、

基本的な操作になるのではないかと考えられます。

②粘土活動の段階分けについて

先ず、粘土活動の段階分けを述べる前に、一例として、実験群

A夫の1～15回までの粘土活動を、変化のみられるいくつかの流れに区切り、その概略を述べると

・1～3回 出されている粘土を、そのままの形で重ねたり、並べて扱い、友だちは粘土を貸してあげない。

写真1 粘土活動



(『大きな、ドーフ粘土の塊りを投げたり押したり、たたいたりして、四角にのばし、牛乳びんのふたをつけ、バスを作れる。作ったバスを持って走り廻って遊び、紙細工をしている机に置き、そこで、またドーフ粘土をつけて「どこ行きのバスって書いてあるの」などといながら、20分間ほど、遊びが続いている』)

水道へ行つ

て手をぬらしてくる。

A夫 「えーと
ね、えー
バスぬら
して、キ
ヤーあー
ぬらしち

・4～8回 粘土活動の場が広がり、ちぎった粘土を、手、指先による動作を活発にする。

・9～12回 粘土が遊びの中で扱われるようになる。

・13～15回 心から楽しんで遊ぶ。

例、14回目の記録より

やう、バスぬらしちゃうぞー、雨、雨、雨々々々……」と、歌を歌うようないいながら、ぬれた手で、ドーフ粘土のバスの上をなでまわしたり、たたいたり、押したりいろいろする。

保育者A 「雨が降っているの？」

保育者A 「びちょびちょになつていてるじゃない」

A 夫 「びちょびちょ、又、又も、又又も、又又又々々……」

と水道へ行き、コップに水を入れて持つてくる。

保育者B 「ちょっと待ってて」保育者Bが机の上の物をどける

間もなく、ドーフ粘土のバスの上に水をかける。

保育者A 「もう雨降りおしまい」

保育者B 「ほら、台風がきちゃつたでしょ」と床までたれた水をふく。

保育者A 「お手てふいて」

A 夫 「ワイヤーだー」と保育者A、Bのいうことなど、かまわ

ずに、楽しそうにぬれた手でバスの上をワイヤーのように、半円に両手を動かす。

(この先も、何回も手をぬらしてきては、楽しそうに

15分ほど遊びが続

く)

このように、他の被験児にもそれぞれの粘土活動の流れがありま

す。そこで、実験群の

粘土活動の経験が、全

く初めてであったB夫

の粘土活動の流れを基準にして、扱う量、動作的な観点、構成的な

観点、その他と、5つ



写真4 第3段階



写真3 第2段階

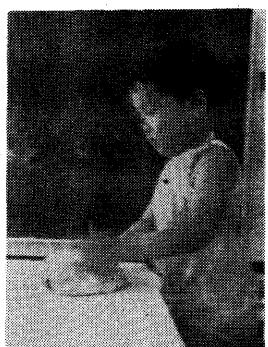


写真2 第1段階

表 5 粘土活動の段階

段階	項目	内 容	実験群			
			A 夫	B 夫	C 夫	E 子
1	扱う量	与えられた粘土をそのままの形や少量とてその取った粘土を扱う	第1回	第1回		第1~6回
	操作	主に手指先で軽くさわる程度に操作する(こねる、たたく、まるめる、手をこすり合わせる、ひっぱる)		1~7	第2~12回	1~6
	構成	与えられた粘土をそのままあるいは少量とて、操作的な扱いをして並べたり、重ねる	1	1~6	8~12	1
	遊び	扱っている粘土を断片的に名付ける(ex・りんご、だんご、へび)	4~7			1~4
2	扱う量	塊りに操作を加え扱う、塊りから一握より大きくなじぎって扱う	3~12	9~11		7~15
	操作	第1段階より手指先をより活動的に操作し、新しい操作もする(投げる、ひねる、足で踏む)	1~15	9~14		5~15
	構成	塊りやちぎった粘土を手、指先の操作をして並べたり、重ねる	2~10	8~13		5~14
	遊び	手、指先で粘土を操作している時、粘土につながりをもつた話ををする	8~15	11~13		8~15
	その他	水、牛乳のふた、汽車などと一緒に扱う	2~14		8~12	
3	扱う量	大きな塊りを扱う	13~15			
	操作	手、指先のみならず、全身で力を入れ活動的に操作する(塊りを投げる、机のへりを利用してちぎる)	11~15			
	構成	大きな塊りで目的を持って一つの形を作る(ex・バス、顔)	14~15			
	遊び	粘土で作った物で遊ぶ	14~15			
	その他	はさみで切る、ブロックなどにつめる、目的を持って牛乳びんのふたを粘土につける	14~15			

の観点に分類し、段階分けを試みてみました。表5の通りです。

この表から、実験群についてみますと、明らかに、15回の粘土活動で各被験児が、第1段階から第2段階へ、あるいは、第3段階へと粘土活動全体の幅が広がっていきます。例えば、操作の面では、第1段階は、こねたり、まるめたり、たいたり、ひっぱったりします。第2段階へ入りますと、第1段階より、手、指先をより活動的に動かし、新しい操作として、投げたり、ひねったり、足で踏んだり、瓜でひっかくなども行なうようになります。

第3段階になりますと、手、指先だけでなく、全身で力をこめ、活動的に操作を行ないます。新しい操作として、机のへりを利用して粘土を切ったり、粘土の上に乗ったりします。このように、粘土活動は変化していきます。一方、統制群では、ほとんど、第1段階の基本的な活動だけで終り、3回だけの粘土活動ではその変化をつかむことはできませんでした。即ち、手の運動、指の運動などの触運動経験を多くつみ、それによって、粘土が形を変化し、分離し、結合する状態を見る経験をつむことと、さらに、また、日常のいろいろな経験をつんで、あるものを表現したいといふ意欲を持つことなどによって粘土活動はより高度の段階へと発展していくのではないかと考えられます。

次に、実験群を個人別にみてみると、活動的である、A夫、E子は、各項目にわたり、操作数の増加や、操作の技術面の高度度

化、その他、粘土活動全体にわたり、変化をはつきりとらえられました。一方、B夫、C夫の積極性に欠ける被験児については、操作数の増加が多少みられましたが、粘土活動全体の変化は少ないでした。また、D子は、15回の実験中、一度も粘土活動は行ないませんでした。このように、個人差の大きい点がいえます。このことは、幼児期の発達の特徴に、個人差が大きい点があげられていますが、粘土活動のその発達も、このことに関係して、個人差が大きいのではないかと、一つには考えられます。

③紙細工活動について

実験群が12回の粘土活動を行なつてきた時、13～15回まで、新しい活動として、紙細工活動も同時に行なつてみました。一方、統制群は、1～3回、粘土活動と紙細工活動を同時に行なつてみました。そこで、両群の行なった紙細工活動を比較し、どのように違ひが表わされるか、みるとしました。先ず、材料別にみた各回の被験児の主な扱い方を表します。この表から、各被験児の材料別にみた扱い方の数は、表7の通りです。

扱い方の技術的な点は別として、実験群の方に多く、いろいろな扱い方をしていくことがみられます。また、扱っている材料も、牛乳びんのビニール、割りばしなど、実験群だけに扱われています。

次に、目的をもつて作った物を見てみると表8の通りです。

表 6 材料別にみた各被験児の各回の主な扱い方

材 料	扱 い 文	実 験 群			統 制 群					
		A 夫	B 夫	C 夫	D 子	E 子	F 夫	G 子	H 子	I 子
紙	紙を折る 紙をまるめる 紙にのりをつけ折る、ひねる 紙にのりをつけ折る、ひねる 二枚以上の紙をのりでつける									②
紙とのり	紙を切る									③③
紙とはさみ	紙を切ってひねる クレヨンで画いた紙を切る 目的をもってクレヨンで画いた紙を切る	①	③					①	①	①②③
紙とのりとはさみ	紙を切り、のりをつけてはる 紙にクレヨンで書き、切ってのりをなすりつける							③	③	
紙とぞうきん	紙にぞうきんで紙を包む							①	①	①
紙と粘土	紙で粘土を包む							②	②	②
牛乳びんのふた	牛乳びんのビニールで包む ふたにのりをつけ重ねる	①	②③	①	②	①	②	③	③	
箱	ふたを紙に貼る 目的があつてドーフ粘土につける 箱を重ねる 箱に紙を入れる 箱に紙をまきつけセロテープでとめる									①
割りばし	紙を切ってのりをつけ箱に貼る 目的があつて同上のことをする 目的があつて箱に牛乳びんのふたをセロテープでとめる 目的があつて割りばしに紙をセロテープやのりでとめる 目的があつて同上の物にふた、ビニールをつける							②	②	

註 実験群 ①②③は実験回数の13, 14, 15回に当る

統制群 ①②③は実験回数の1, 2, 3回に当る

表 8 目的をもって作った物

項目	実験群			
	A 夫	B 夫	D 子	E 子
紙	③たこ			③たこ
牛乳びんのふた	②粘土のバス			②粘土の顔
箱	③車			
割りばし			②旗	③自動車

項目	統制群			
	F 夫	G 夫	H 子	I 子
紙				
牛乳びんのふた	②ロボット			
箱			③きれいな箱	
割りばし				

註 実験群①②③は実験回数の13, 14, 15回に当る
統制群①②③は実験回数の1, 2, 3回に当る

表 7 材料別にみた扱い方の数

項目	実験群				統制群			
	A 夫	B 夫	D 子	E 子	F 夫	G 夫	H 子	I 子
紙を中心の扱い	12	2	4	0	3	1	1	0
牛乳びんのふたを中心の扱い	4	2	1	1	3	2	0	0
箱を中心の扱い	6	0	2	0	0	1	0	1
割りばしを中心の扱い	2	0	0	1	1	0	0	0
計	24	4	7	2	7	4	1	1

写真7 E子「くるま」 写真6 A夫「たこ」

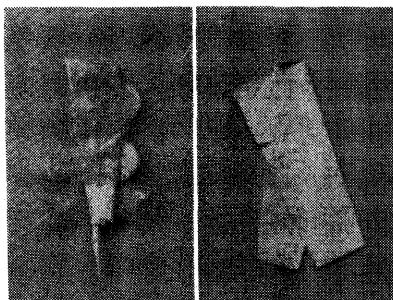
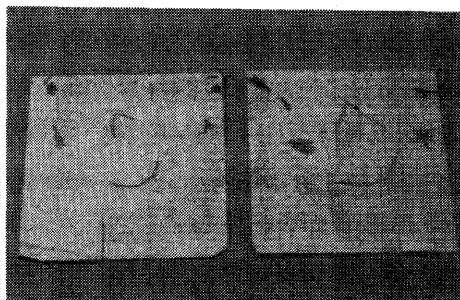


写真5 E子「たこ」



実験群では、4人中3人が扱っている材料は、それぞれ違いますが、目的を持って扱ったことがありました。例えば、紙の項目で、E子が「たこ」といって作り、それを保育者が他の被験児にみせると、A夫が「たこはねー」と真似してたこを作ったりしました。割りばしの項目では、名付けたのは異なっていますが形はよく似ていて、E子が割りばしを使い始めると、それを見ていたD子もそばへきて、割りばしを取つて「旗」を作りました。統制群で目的をもって作られた物は、F夫が保育者が箱と牛乳びんのふたを持つて、「ビルディングでも、東京タワーでも、自動車でも、ロボットでも」とい

写真10 H子「きれいな箱」

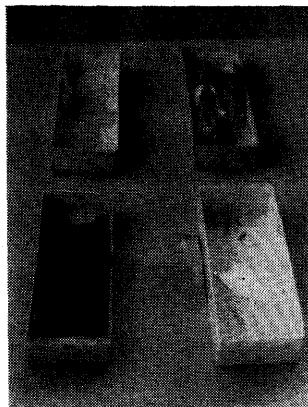


写真9 F夫「ロボット」

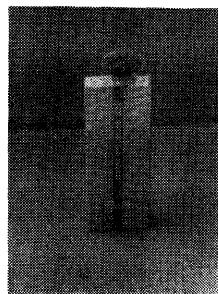
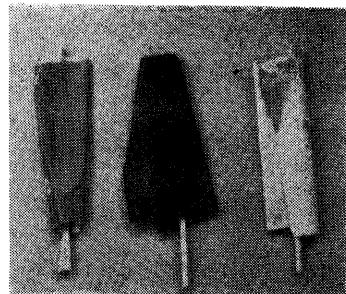


写真8 D子「旗」



いながら、あれこれ動かして
いるのを真似し、箱の上に牛
乳びんのふたをのせ「ロボッ
ト」といって作りました。H
子の箱の扱いは、第1回の時
は、目的なしに箱の中側に、
折り紙を貼っていましたが、
第3回の時に「きれいな箱を
作る」と、目的をもって、
自分の気に入った折り紙を切
つて箱に貼り、きれいな箱を
作りました。

次に、ドーフ粘土と紙細工
の材料を合わせ用いた材料

は、牛乳びんのふ
たのみで、実験群
の、A夫、E子の

二人だけにみられ
ました。これら
は、二人とも目的
をもって扱ってい

ます。D子の箱の扱いは、第1回の時
は、目的なしに箱の中側に、
折り紙を貼っていましたが、
第3回の時に「きれいな箱を
作る」と、目的をもって、
自分の気に入った折り紙を切
つて箱に貼り、きれいな箱を
作りました。

写真11 A夫「バス」



群が紙細工活動を行なう前、12回の保育がなされたことが、
このような結果になつた一要因であろうと考えられます。

3、結論

この実験でみられた2才児の粘土活動では15回の経験で、粘土
操作は操作数の増加と共に、その操作 자체が技術的にも高度化し
ていきます。また、扱う粘土の量も、増していきます。
また、実験群、各被験児の粘土活動の変化は、個人差が大きく
あります。しかし、保育効果はみることができます。

以上の点から考えてみると、ある課題に対しても保育経験で
の効果を期待することができますが、この年齢の幼児の指導にお
いては、個人差が大きい点を、充分考慮に入れて行なわなければ
ならないといえます。

(お茶の水女子大学)

ました。

以上、紙細工活動を、実
験群と統制群を比較してみ
ますと、実験群の上に、多
くの扱い方をし、目的をも
つて作る被験児が多いとい
う点が挙げられ、保育効果
があつたといえます。実験